



若 者

アメリカで感じたこと

佐 田 和 己*

Impressions of Life in U.S.A

はじめに

1998年10月から1999年8月末まで約11ヵ月間、アメリカ合衆国コネチカット州ニューヘブロン市にあるエール大学で客員研究員として過ごす機会を得た。本稿では米国滞在中に感じた社会生活でのアメリカと日本の文化・習慣の違いについて感じたままに述べたいと思う。

資源の無駄使い

アメリカと日本では資源の無駄使いも違う。随分前になるが、割り箸の無駄使いが日本で問題になったことがある。しかしながら、アメリカの紙の無駄使いもすごい。ファーストフードでは紙ナプキンを客が一握りぐらいつかんでもって行く。大学、スーパー、ガソリンスタンドどこでもトイレの手拭き用の紙(トイレトペーパーではない。手を洗った後の手を拭くための紙)は使い放題であり、紙が切れていることはない。そのおかげでハンカチを持たない習慣がついてしまい帰国後随分困った。しかしながら、アメリカではプレゼントは自分で包装する習慣があるため、お店での包装は簡素であり、たいいていポリエチレンの薄い袋に投げ込まれる。日本ではこの点が過剰包装である。

「選択」の重要性と公正さ

アメリカで生活を立ち上げる時、痛切に感じたこ



*Kazuki SADA
1963年3月2日生
平成2年京都大学大学院工学研究科
合成化学専攻単位認定退学
現在、大阪大学大学院・工学研究科・
物質・生命工学専攻、助手、工学博
士、包接化学
TEL 06-6877-5111 (ext. 3424)
FAX 06-6879-7404
E-Mail sadakazu@ap.chem.eng.
osaka-u.ac.jp

とは選択することの重要性である。身近な例として、サンドイッチ屋のオプションの豊富さである。パン、挟む肉類の種類から、チーズや野菜の有無、ケチャップやマヨネーズなどの香辛料まで、細かいことをあれこれ店員に尋ねられる。またレストランでも、飲み物、主菜とそのソース、付け合わせとその調理法、サラダのドレッシングまでやはり多岐に渡って尋ねられる。アメリカ人の客をみると、大勢で来ているも皆てきぱきと注文している。カウンターやメニューを前に思い悩んでいる姿を一度も見ることがない。ニューヨークの観光地のカフェテリアでメニューを見上げ悩んでいる姿を見かけたが、やはり日本人観光客であった。言葉の壁があるとしても、大の大人が指をさして悩んでいる姿(わが身を含めて)はアメリカでは奇異である。この日本人の優柔不断さはアメリカに住んではじめて気がついたことである。日本では「選択する」より「選択させられる」ほうが多いため、選択するクセがついていないのであろう。日本人は自分に情報がない場合、相手の「おまかせ」コースを選んだり、相手にあわせてりする。つまり相手側に選択肢を絞らせ、その中から選択しようとする。日本人の多くがこの受け身的な選択に陥っていると思われる。この受け身的な選択の悪いところは最終的な判断は再び自分に戻ってくるので、自分が選択したような気にさせられる点であり、また必ずしも正しい情報から考えた選択ではない点である。相手側にもし悪意があれば、相手側の都合のよい方向に誘導されるかもしれない。しかしながら、このような安易な選択でも意思決定の表明であり、その結果については当然の責任をとる必要がある。これが自己責任である。アメリカでは正確な情報を手に入れ、それをもとに決断を行う。そのため、はっきりと意思決定をし、選択した自分がその結果についての全責任を負うことが当然となっている。また、結果が自分の予想と違うと判断した場合、すぐに次の行動を起こす点がアメリカと日本の違いである。

この違いが日米の学生の行動によく現れている。私の所属する研究室の学生のなかに「自分は化学に不向きであるので、卒業研究の実験を強制しないでほしい」と文句をいう学生がいた。彼は化学が嫌いであるにもかかわらず、ずるずる大学で化学を学び続けてきたという。自分で「選択」して化学を学ぶために入学したはずであり、化学に不向きと悟った時点で人生のコースを変えるべきである。しかしそういう判断は彼にはなかったようである。偏差値による受け身的な選択しかできず、選択の結果が予想と異なるものであっても、不満をためておくことでしか責任をとれない日本の学生は哀れなものである。これに対し、滞在先の研究室の大学院3年生の学生が突然学校を止め、修士として製薬関係の企業に就職した。理由を尋ねたところ、本人は自分は研究に向いていないので、とりあえず今まで得た知識を使ってお金を貯め、どこかの大学のロースクールに入り、法務関係の仕事がしたいと言っていた。人生は様々な選択から成り立っており、時には選択を誤ることもある。選択を誤ったとしても、積極的になんとかしようとする生き方のほうが自然であり、楽しいのではないだろうか。大競争時代のなかで社会が積極的に選択でき、人生を切り開いていくことのできる若者を育てる必要性があると感じた。

この選択のためには「公正な」情報が必要であり、アメリカ社会では公正であることが尊ばれる。うその情報を流したり、情報を隠したりする行為は反社会的な行動であり、罰則は厳しい。正しい情報を公開し、それを元に個人が正しいと考えるものを選択するのが、アメリカの民主主義の基本である。日本では民主主義は多数決で決められることとと思っている人が多い。公正な情報なしには正しい選択ができないことを日本人は良く理解する必要があると思った。

土地の広さが持つ豊かさ

われわれが滞在していた東部海岸線はアメリカで最も人口密度の高い地域である。しかしながら、ニューヨークやボストンなどの一部の大都市を除いて、市街地は緑にあふれている。街路樹は樹齢何年という大木がうっそうと茂っており、民家の庭先は木が植えられ、芝生が敷き詰められている。弊がないため、緑がグリーンベルトのように広がっている。高台から望めば、緑の海の中に家が点在し、民家がとぎれた向こうは樹海が遠くかなたまで続いている風景を

みることができる。市街地を抜けて5分もハイウエーを走れば、手つかずの自然が残っている。郊外の浜辺、湖沼、河川、山などに州立公園が整備され、自然のもとでサイクリング、カヌー、水泳、日光浴、トレッキング、ローラスケート、スキーなどのいろいろなアクティビティを楽しむことができる。キャンプ場やロッジなども併設されており、泊まりがけで自然と親しむ人も多い。これに対し日本では、都市近郊ではほとんどの土地が家屋や農耕地になっており、平地を広い範囲にわたって、公園などとして自然のままの状態にしておくほど余裕がない。手つかずの自然は山林や険しい海岸線でしか見ることができない。また都市の住人が自然を求めて郊外の公園へ出かけたとしても、行き帰りの車の渋滞、駐車場待ち、公園での混雑など、自然を満喫することがなかなか手軽にできない。日本では味わうことができない土地の広さからくる「ゆったり感」がアメリカの精神的な豊かさの源ではないであろうか。また、日本ではゴミを捨てる場所や焼却する場所が問題になってきている。これはゴミ処理施設があまりに居住区域と近いためである。アメリカでは国土は広く、ゴミを廃棄できる場所がたくさん残っており、大量消費・大量廃棄がまだまだ可能である。狭い日本ではアメリカ型の大量消費・大量廃棄を続けて行くことは物理的に無理であり、ヨーロッパ型のリサイクル社会への転換が必要であるとしみじみ感じた。

アメリカ人のマナーの良さはつとに有名である。実際、われわれが訪れたどの州立公園でも国立公園でもまずゴミは捨てられていない。このマナーは見習うべきであると思った。しかしながら、これは公園での話であり、ニューヨークでパレードに偶然遭遇したことがあるが、パレードの行列も観客も大騒ぎである。驚いたことにパレードの通過したあとは道路は見物人の散らかしたゴミだらけであった。アメリカ人も時と場所を選ぶようである。

晴れ姿

米国滞在中に同じ研究室の最高学年の大学院生がドクターコースを修了した。最終的な試験(defenceと呼ばれている。)は日本の博士論文の公聴会と同じ形式で研究科の教授達の前での発表である。日本のような緊張したムードではなく、リラックスした雰囲気の中で行われた。研究発表そのものは日本とほとんどかわらない。しかし、彼の両親と家族

(奥さんと娘さん(2才))が公聴会に出席していたことと両親・家族への謝辞から公聴会がスタートしたことは日本と違っている。彼の両親は公聴会に出席するためにユタ州(中西部)から仕事を休んでこちらに来ていた。両親は彼の話す研究内容をほとんど理解できないと思われるが、一番前の真ん中の席に二人並んですわり、彼の話に熱心に耳を傾けていた。また、娘さんもベビーカーの中で静かに父親の発表を聴いて(?)いた。公聴会に家族や両親を呼ぶのはアメリカ、少なくとも私の属していた研究室ではあたりまえであるとのことであった。日本とは対象的である。私は日本で家族や両親が公聴会に出席しているのを一度も見ることがない。また私自身も公聴会に両親を呼んでいない。しかし、公聴会は大学院の5年間で自分が何やったかを発表する場であり、周囲の人の支えなしには達成できないことである。感謝する意味を込めて、公聴会に招待するのは当然のような気がする。日本でも積極的に両親を公聴会に招待することを推奨してもよいのではないかと思った。また公聴会終了後、彼を囲んでのお祝いの会があった。彼の両親はシャンパンの注がれたグラスを片手に非常にうれしいそうであった。アメリカ人は“I am proud of you.”(直訳すれば、「私はあなたを誇りに思う。」)と日常的に自分の子どもに向かって言っているのであるが、このときばかりはまさに“I am proud of you.”であり、両親が目を細めて彼の様子を見ている姿は感動的であった。父親はやはり恥ずかしいようでありあまり会話に加わらず、母親が自分の息子のことをしゃべっている様子は日本もアメリカも同じなので、思わず苦笑してしまった。

「やさしい」社会

アメリカ社会は社会的弱者はやさしい社会であり、基本的に親切である。特に子ども(幼児)には非常にやさしく、寛容である。娘はちょうど2才前後をアメリカで過ごした。彼女はどこへ行っても人気者であり、アメリカ人に“cute”とか“honey”とか声をかけられていた。最初は恐がっていたのであるが、次第に慣れてきたようで、小声で“Hi”と返事ができるようになっていた。この人なつっこさとこども

にやさしい社会は日本とは大きく違う。このことを思い知らされたのが、帰国直前のシカゴの空港であった。帰国便に搭乗するべく、搭乗口で並んで待っていたのだが、娘が少し騒いでおり、前に並んでいたスーツをびしっと着込んだ若い女性の靴を誤って踏んでしまった。相手がアメリカ人なら、娘を見て、“OK, No problem!”と言って、笑顔を返してくれるのであるが、相手は日本人である。私と妻はすぐにあやまったのであるが、彼女は子どもと私たちをすごい目つきでにらみつけ、やおらポケットティッシュを取り出し、これみよがしにすぐさま靴の汚れを落した。そうしてもう一度子どもをにらみつけた。私と妻は大変驚いた。ああ日本に戻るんだなあとしみじみ思った。アメリカでは、幼児というものは時には粗相をしてしまうこともあるが、それは故意のものではないと理解され、その行為は非難の対象とならないのである。その感覚に慣れており、こどもの少々のミスは大目に見てもらえるのに思っていたので、彼女の反応の激しさにたじろいでしまった。日本の幼児の粗相は親のしつけが足りないということであり、親も子も非難される。この社会全体がもつ弱者への「やさしさ」の欠如が家庭内での暴力や幼児虐待などにつながっているのかもしれない。

おわりに

10ヵ月間という短い滞在であったが、多くのことを学ぶことができた。特にアメリカと日本の考え方や習慣の違いを知ることができ、日本社会や日本人のおかしな点を発見し、実感できた点が研究成果とは別に最も大きな成果と思っている。アメリカ型の自由化した社会は決してバラ色の社会ではない。1人の成功者のまわりには多数の敗者が眠っているはずである。日本も自由化という波に飲まれて、ぬるま湯社会から厳しい競争社会へ変革して行く必要に迫られている。そのためには公正な情報の開示を徹底する必要がある。情報の独占・操作などによって引き起こされる不正行為を防止する手だてが必要であると考えられる。最後にこのような機会を与えていただいた宮田教授ならびに研究室のメンバーに感謝したい。